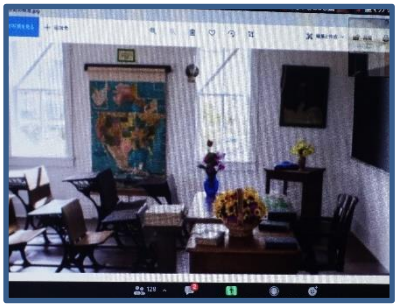
元気っ子　Ｎｏ290 ながさわ保育園

園　長　　中　瀬　弦　偉

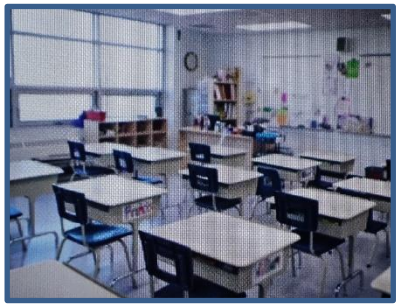
●少し古い２００６年のものですが、最近、こんな冗談が書かれた記事を読みました。

『ワシントン・アービングの小説の主人公、アメリカ版「浦島太郎」のリップ・バン・ウィンクルが１００年の眠りを経て、２１世紀に甦った。あまりにも変わってしまった世の中を見て彼は当惑した。男の人も女の人もせかせかと飛び歩き、耳に小さな装置を付けて話している。若者は家のソファーに座り、スクリーンを動き回る小さなキャラクターを動かしている。老人は死と身体の障害を寄せつけず、胸にメトロノームを付け、股関節は金属とプラスチックでできている。空港、病院、ショッピングモール、どこに行ってもリップは途方にくれた。しかし、彼が最後に学校の教室に足を踏み入れた時、老人はここがどこなのかすぐに理解した。「学校だ」彼は続けた。「まるで１９０６年に戻ってきたようだ。何もかも変わらない。いまだに黒板と言いながら緑なのか」』

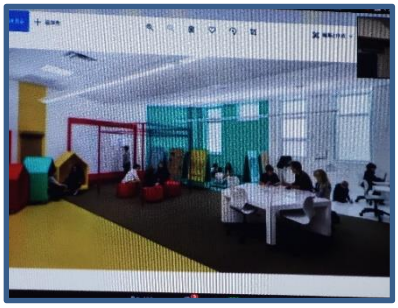
●先日、保育園で受講したオンラインセミナーでも、１９世紀の教室、２０世紀の教室、２１世紀の教室がそれぞれどうなのかを紹介されていました。



１９世紀の教室



２０世紀の教室



２１世紀の教室

●これも少し古いものではありますが、朝日新聞に１４歳の中学生が「不安だが伝統と言われ仕方なく」というタイトルでこんな記事を投稿していました。

『私もこの前、組み体操をしました。不安を抱きつつも、伝統だと言われ、致し方なく練習に参加しました。そのとき体育の先生が一言。「とても危険な種目なので、気を引き締めて行って下さい」不安は疑問に変わりました。危険な種目ならば、やらない方がいいのでは？練習を重ねるごとに、タワーから落ちる人は増え、それを克服するために練習に練習を重ねて疲れてしまい、落ちる人がさらに増えました。幸い、今回は重いけがを負った人は出ませんでしたが、過去には骨折した人もいたそうです。先生は組み体操を行う理由を、感謝を学ぶためだといいます。ならば問います。感謝って普段から学べませんか？感謝はいつでもできますし、どこでも学べます。危険を冒してまで学ぶことなのでしょうか。』

我々大人は、時代の変化を敏感に、また正確に捉えながら、時代が求めるもの、その本質をしっかりと見極めていかなくてはいけないと深く感じさせられたエピソードでした。